

空

平成25年2月20日発行

第11卷1号

通巻第47号

空



2013・2

SORA 47号

木 枯

柴 田 佐知子

海峡を片寄せて椋鳥渡りけり
不知火かどうか分からぬまま帰る
秋簾巻かれて色を濃くしたる
おほかたは松に隠れて松手入
寒鰯を捌く尾鱗の付け根まで
遠火事のひよろりと煙立ちしのみ
木枯や羽毛蒲団に鳥何羽
衰ふる父の記録の日記果つ
どの家も道に出る戸や去年今年
初夢の白狐に礼を返さるる
産土や藁色なせる寒卵

父なくて位牌生まるる秋の暮
御布施手に寒行僧を待つてをり
鉛筆を削る間に年うつりたる
九十の母とその友切山椒
丸めたるごとき子犬や日脚伸ぶ
母の顔照らしてゐたる七日粥
冬ぬくし触るれば綿飴紅を増す
青木の実母との日々は水のごと
春近き空の色なり道を掃く
杖置いて父は来世へ春の雪

宮崎宮五句

冬来る触れて見上ぐる大鳥居
社殿まで抱かれて雨の七五三
七五三伏敵門に跳ねて入る
あやふくてやはり転びぬ七五三
鷹鳩と化し神殿の屋根歩む

福岡 山内 碧

本堂のみ仏遠し報恩講

ふかぶかと首を沈めし鴨流る

石庭の白き光や冬隣

明けしのち刻ゆるゆるとお元日

玄関に正月のみの男下駄

糸田 宮井 知英

冬の瀧巖一枚曝しけり

冬ざるる走り根は崖鷺掴み

ブロンズの少女に触れて寒雀

畑を守り母は老いたり青木の実

手毬つく殺める唄を楽し気に

熊本 松田 明子

塩水で参道清め浦祭

水神へ真水を供へ浦祭

浦祭船の数ほど大漁旗

学校は昼でおしまひ秋祭

快晴を賜るならひ文化の日

兵庫 戸栗 末廣

鼯毬まはりの土の濡れてをり

日曜の小学校の兎かな

耳搔きのふはふは山の眠りたる

あらくれの土を返しぬ神無月

冬の濤見てきて妻に詫び言葉

大阪 青木 朋子

福岡 栗原 京子

開戦日無口な父のやや語る

子の姿追ふ眼ばかりや運動会

弾痕ののこる水筒冬の月

大銀杏遊女の寺を黄に染めし

闇市の革靴溶けしと寒夜の父

ほんたうのことはマスクをとりてより

寒暄や誘言に父平和説く

名を付けて絞められぬ鶏赤のまま

軍毛布一世はなさぬ父なりき

会へぬひと生涯多し皮手袋

長崎 鳳 蛭 華

粕屋 長 憲 一

柿紅葉濡れて折敷の中にあり

冷まじやたてがみ荒き岬馬

日翳るやいなや白菊一步前

髪かざり揺れどほしなり七五三

風情ふと見返り美人花すすき

コスモスの先の岬も揺れてをり

貝殻を真砂と砕く寒怒濤

野良犬の影長く行く冬の土手

人間臭きフランス映画マスクして

初十夜大提灯の照らしをり

東京 山田 正子

砂時計みな砂落しシクラメン
雪吊やがんじがらめの男振り
砂町に下駄の音する波郷の忌
聖夜劇駱駝の足もほめられて
病床六尺子規の遠目に冬桜

行橋 安武 晨子

冬籠といひて何かをして居りぬ
茶室閉づ関守石に積む落葉
石路の花逢瀬の刻はすぐ過ぎて
年明くるわが名わが生自祝して
年新た神に浄めの杓ひとつ

大阪 田岡 千章

鬼の子の垂るるもうすぐ夕ごはん
蓑虫が貌出す世界は広いひろい
蔓零余子こぼして役の小角かな
硬骨は貫き難し黄落期
立冬や藍に乾けるふきんの字

福岡 田代 貞枝

黒猫の擦り寄りて来る雪催ひ
暮の街眩し看護の道冥し
冴返るサインの歪む承諾書
病室に孫の寄せ書き年移る
病棟は白衣のままに去年今年

須 惠 苑 実 耶

東 京 今 井 春 生

房まはし綱を渡れり博多独楽

黄落のゴツホの病室鉄格子

達筆の墨の匂ひや年賀状

金粉の入りし葛湯や河原町

血圧を計る三人コート脱ぐ

冬うらら今か今かと間欠泉

雪合戦敵も味方も頬赤し

丸の内大名通りの聖樹の灯

輝割れの手をもて背中搔いてやる

鎌倉の矢倉に死せり冬の蜂

山 梨 野 畑 さ ゆ り

吉 井 高 倉 恵 美 子

寒椿裏方で終ふ蛇笏展

待つことに慣れし病室枇杷の花

真青なる甲斐の空より柿もぎぬ

マスクして今日も夫来る雨の中

吊し柿透き徹りける波郷の忌

たつぷりの冬日に染まる髪淡し

小座布団もちて小春の句会かな

何気ない言葉交して年明くる

野沢菜のおやきのぬくし年の市

今も細きふるさとの道日脚伸ぶ

須惠 古川 夏子

逆光に狐出て来よ芒原
立冬の水底覗く巨鼻かな
帰るべき故里なくし年の立つ
誓ひても命尽きなむ白障子
雪積むや睡りの中へ遊びゆく

福岡 吉村 摂護

柿日和いよよ老人介護なり
大雪や杖に腕を継ぎ足して
朝の茶を淹るる音聞く蒲団かな
冬の日や棚田組む石みな丸し
冬夕日棄てし故郷の上をゆく



空作品抄
柴田佐知子抽出

夜に入る間合の空を冬の鳥

高倉和子

豊漁も不漁も酒ぞ鰯起し

中田みなみ

道連れの相手わからぬ夢はじめ

荒井千佐代

鯛焼の温み病ひの慰みに

服部早苗

飯盒は夫の青春山眠る

柴田志津子

親として言ふべきは言ふ松の内

だいじみどり

水面揺らさず寒鯉の反転す

野上杏

風花や天寿の骨の太々と

吉田 菫



闇汁の箸を誰かに掴まるる

天井に籠ののたうつ紅葉寺

岩穴に眼のごとき寒の水

老僧が杖で払ひし恋の猫

獅子舞の地下足袋のまま上がり来る

何もかも昔のことよ日向ぼこ

ポスターの左剥がれて憂国忌

玄関に正月のみの男下駄

手毬つく殺める唄を樂し気に

弾痕ののこる水筒冬の月

人間臭きフランス映画マスクして

名を付けて絞められぬ鶏赤のまま

冷まじやたてがみ荒き岬馬

原 友子

あさなが捷

矢野百合子

小林朱夏

秋 千晴

樋口みのぶ

亀井紀子

山内 碧

宮井知英

青木朋子

鳳 蛮華

栗原京子

長 憲一

聖夜劇駱駝の足もほめられて

石路の花逢瀬の刻はすぐ過ぎて

待つことに慣れし病室枇杷の花

雪積むや睡りの中へ遊びゆく

屠蘇散の糸がつつと注ぎ口に

唐辛子故郷の山へ逆さ吊り

糸屑を指に丸めて夜食とる

たこ焼きをまあるく返す文化の日

竹馬に太平洋のひろがれり

奔放に生くるも一世牡丹焚く

小春日の集まつてゐる夫の髭

地に還る落葉の嵩のただならず

名画座のここも閉館秋の暮

山田正子

安武晨子

高倉恵美子

古川夏子

原友子

長節子

池田華甲

田岡千章

戸栗末廣

宮井知英

白水良子

松田明子

織田高暢



乳飲み子を胸に眠らす煤籠

拾はれし猫の子胸に啼くばかり

狐火や寺のご新造若づくり

寄つて来し鹿の目澄んでゐたりけり

仮の世と僧の語れり着ぶくれて

室内のひとり体操日脚伸ぶ

真夜中に雨戸をたたく雪女

雪山を賞でて別るる遠忌かな

冬帽子目深にかぶり蚤の市

碧空へ続く霊園石路の花

冬麗やいまだ熔岩出づる島

みどり児の爪切り難し冬籠

漱石忌背にも腹にもカイ口貼る

湯村 栞

苑 実 耶

鳳 蛮 華

石川 叔 子

亀井 紀 子

清水 量 子

伊東 孝 子

野畑 さ ゆ り

井手 本 恭 子

桜 三 奈 子

古川 夏 子

仲里 奈 央

青木 朋 子



寒紅をさして卒寿の笑顔かな

誰も来ぬ門燈点し初時雨

締切のある世を生きて冬の虹

寡婦の名に生きし古家に八つ手咲く

奥英彦の一戸一灯冬に入る

日の中へ釣船の入る冬の風

冬至晴れレモンの色の列車くる

マナティもデュゴンも人魚クリスマス

真冬なり夜の雨戸を繰る音も

枯蟪蛄石の地蔵の頭を押へ

金風や餅踏みの子のよく笑ひ

病みたると思ふ落葉を踏む音も

新聞をきちんと畳む霜夜かな

遠山のり子

小川 涼

今井春生

山口弘子

安武晨子

田邊豊子

木村 信

岸 千手

田代貞枝

吉村摂護

ふじの茜

川崎よしみ

神谷耕輔